池内紀評

# 死を生きた人びと

## 訪問診療医と355人の患者

小堀鷗一郎著(みすず書房・2592円)

戸口に死がやってきたとき、住み慣れたわが家で死と対面した。ある人は一日で終わった。ある人は何年も向き合っていた。やがて定めのような時がくる。医師はその間、死にゆく人の置かれている状況を、つぶさに見ていた。

二〇二五年には、日本の人口の三分の一近くは六五歳以上の高齢者が占める。そのうち四分の一から五分の一に介護が必要になる。いわゆる「高齢者の人口爆発」は目前だ。

外科医小堀鷗一郎は六五歳の定年まで四〇年間、大学病院・国立医療機関に勤務した。職務は主に外科医としての手術だった。定年退職後、埼玉県新座市の堀ノ内病院に赴任した。二年ばかりして、退職する同僚にたのまれ、寝たきりの患者二名を引き継いだ。「私はそのとき初めて、医師が患者宅を訪問することによって成り立つ在宅医療というジャンルが存在することを知った」

二〇〇五年二月のことである。おりしも国が高齢者の終末期医療の場を、病院から自宅へ転換し始めたころだった。小堀医師は訪問医療の黎明期、そしてそれが急速に制度化されていくのもまた、みずからの体験でつぶさに知った。

未知の世界に足を踏み入れて半年もしないうちに、往診患者数は二〇名をこえた。四年後には四〇名、九年目には一〇〇名あまり。一三年が経過して記録をまとめたとき、三五五名の臨終にかかわっていた。そのうち在宅死が二七一名。厚生労働省の用語をあてると「在宅看取り率七六・三%」。八割が病院で死亡する医療の現状からすると、驚異的数字である。

むろん、そのことを言うために記録をまとめたわけではない。語り口のない死者に代わり、そのメッセージを伝えるためである。「これらはさまざまな思いを通してこの世を去った人々への私の挽歌である」

42の事例が選んである。そこから、さまざまな現実が浮かび出る。医療先進国ニッポンが、ひたすら「生かす医療」一辺倒で進んできて、欧米ではとっくに実現している、やすらかに「死なせる医療」に目をくれなかった。事例を通して、この医師の終末医療に対する考えが見てとれる。

事例25 七六歳男性、胃がんの手術をしたが再発。自宅に帰ることを強く希望。「初めての訪問診療時は、ひどく痩せて腹水がたまり、食事もほとんど取れていなかった。本人の第一声は『好きな酒が自由に飲みたい』ということであったので、その場で好きなだけ飲んでよい、と許可した」

小堀医師はある日、昔、患者から贈られたジョニーウオーカーの青ラベルが自宅にあるのを思い出し、持参した。コルク栓が劣化しており、栓抜きもないので、スプーンの柄を使った。大量のコルク屑と一緒に、酒好きの患者と訪問診療医は乾杯した。患者は嬉しさのあまり、もうすぐ生まれる孫に医師の名前をつけると言い張ったが、医師は祖父となる当人の名前の一字と組み合わせて「久一郎」で折り合いをつけた。「この提案は母となる娘に即座に却下された」

事例28 九三歳女性、長女と二人暮らし。中年の長女に明らかな身体上のハンディキャップが見られた。二年九カ月、月一回の訪問診療を行った。最期が迫っていることが明らかになったが、本人も長女も入院しての延命措置を望まなかった。その様子を知る新宿のバー「風紋」の女主人、林聖子(今年九十歳)は堀江敏幸との対談で、太幸を「面白いおじさん」「撮影されるときは『憂鬱そう』に演出していた」と語っている。(川)

# どう死ぬかというメッセージを伝える

ようなある日、訪問医はふと口にした。この二年間、自分がいつも感じたのは「娘さんの暮らしぶりがきわめて自然だということ」。母親の教育が良かったからで、その意味で「娘さんはあなたの勲章」だと言える。

患者である母親は、目を閉じたまま、身じろぎもせず聞いていた。いつもは丁寧な挨拶を欠かさない人が、一言も発しなかった。一カ月後の死のときまで、この件はまったく話題に上ることなく、「通常の、ごく自然なやり取りは彼女が最期を引き取る直前まで変わるところはなかった」

この本がすばらしいのは、在宅医療の直面している問題点を、一つ一つ具体的にあげていって、改善策を述べていることだろうが、私が目を丸くしたのは、数多くの事例の書き方である。きわめてプライベートな報告であるにもかかわらず、いっさいの情緒をいれず、「私的」な要素がきちんと拭い取ってある。その清潔さは、祖父森鷗外の文体さながらで、その上で当人に代わり、どう生きたいのか、つまりどう死ぬか、メッセージが明瞭に伝えてある。

死にゆく人への深いやさしみと共感。勇気をもって死と向き合った人への敬意である。未知の世界で見つけた人間性の奥深さ。だからこそオートメーション化した現代医療への鋭い批判が出る。家族も患者自身も死を考えない時代相を言わずにいられない。

ところで小堀先生担当の患者がうなぎのぼりにのびたのは、何よりも人間味あふれた人となりによるのではなかろうか。その看取りが患者にとって、死という不安な未知への旅立ちに、どんなにか勇気を与えてくれたことだろう。

## MAGAZINE

**東京人** 7月号 (都市出版・930円)

没後七十年になる太宰治の特集。内容は盛り沢山。中学、高校時代の教科書やノートに書かれたメモ、いたずら書きの紹介。あまり知られていない傑作短編八選。太宰文学散歩。映画化された太宰作品。さらに吉本隆明インタビューの再録など充実している。

若手批評家の矢野利裕によれば、若い世代を中心にした近年の太宰ブームの背景には、従来の暗く、じめじめした太宰から明るくチャーミングな太宰へのイメージの転換があるという。

それを受けるかのように生前の太宰を知る新宿のバー「風紋」の女主人、林聖子(今年九十歳)は堀江敏幸との対談で、太宰を「面白いおじさん」「撮影されるときは『憂鬱そう』に演出していた」と語っている。(川)

**今週の執筆者**

「この3冊」は同志社大教授の浜矩子さん。著書に『世界経済の「大激転」』など。張競さんは明治大教授(比較文学)▽本村凌二さんは東大名誉教授(西洋史)▽養老孟司さんは解剖学者▽鴻巣友季子さんは翻訳家▽池内紀さんは独文学者▽「昨日読んだ文庫」の絵は舟橋全二さん。

## 川上音二郎と貞奴 全3巻

社会評論社・2916~3240円

著者 井上理恵さん

# 研究20年 正当な評価求め

歴史小説などが史実と違っても、娯楽作品であれば許されるだろう。ただ影響の大きさ故に、しばしば誤った解釈や知識を人々に植え付けてしまう。

例えば杉本苑子著『マダム貞奴』『冥府回廊』を原作としたNHK大河ドラマ「春の波濤」(1985年)もしかり。オッペケペ節で知られる川上音二郎、妻で日本初の女優となった貞奴らの虚像やゴシップが独り歩きする遠因となった。脚色は筋に味を付けても、事実を駆逐するのである。

しかし、「偽」を見過ごすことは、演劇学者の矜持が許さなかった。20年もの歳月をかけて国内外の資料を探索し、全3巻から成る本書を刊行した。虚実の入り交じる川上夫妻の言説や像を可能な限り「真」に近づけた労作である。著者は言う。

「大英図書館で偶然、川上一座のロンドン公演記事を見つけたのが始まりです。調べるうちに、国内で川上と貞奴が正当に評価されていないことが分かってきました。演劇史にきちんと組み込むのはもちろんですが、すごく気の毒になって」

先行役者の型を継承する歌舞伎(旧劇)に対し、歌舞音曲に頼らずに自然な演技を目指す新演劇が「まがい物」と低く見られた時代である。正義感が学者魂に火を付けたものの、先の見えない研究の始まりであった。

政談、書生芝居で注目された川上は行き詰まると、欧米の舞台へ活路を求め、喝采を浴びる。マダム貞奴の誕生である。さらに川上は、西洋では一般的なセリフ劇(正劇)を日本に初めて持ち込んだ。列強に肩を並べようと腐心した明治政府も、一座の名声を「文化国家日本」として宣伝に利用したほどだ。

「足跡調査は机上でできるものではなく、一座が巡演した欧米に及びました。場所の記憶といいますか、自分の目で見ないと感覚をつかめません。一つ分かると、次もつながってくる。資料って向こうから寄ってくるんですよ」と笑う。実証主義のたまものである。それは同時に近代演劇の確立を目指した新劇運動「生みの親」とされる小山内薫らがいかに一方的な視点で一座を酷評し、不当に扱ったかを浮き彫りにする作業にもなった。

著者が、進取の気性に富んだ川上こそが「日本近代演劇の祖」と位置づけるゆえんである。

文と写真 中澤雄大

## ことばと遊び、言葉を学ぶ

柳瀬尚紀著(河出書房新社・1620円)

翻訳家の故柳瀬尚紀には、小学校で授業を行った、その講義録ならぬ授業録を一冊の本にした『日本語ほど面白いものはない』という著書がある。本書『ことばと遊び、言葉を学ぶ』は、いわばその続篇であり、滋賀県、福岡県、島根県の三つの中学校で行った特別授業を中心にしてまとめられたものである。

柳瀬尚紀はどこに行っても、その土地にまつわるものや言葉をいわば食材にして、一級品の料理に仕立てあげる。たとえば滋賀県長浜市の中学校では、長浜がかつては長濱と書かれたことから、今は消えた正字の話を語る。鮎をご馳走に出す代わりに、「語」馳走としてアユの同音異義語を並べる。長浜の「長」と英語の「long」の意味が重なるところと重ならないところを解説する。

こうした授業は、たしかに中学生には難しいかもしれない。しかし、柳瀬尚紀はお子様ランチを出すことは一切しない。日本語と英語というとびきり旨い魚を、腕をふるって料理し、旨いものとして生徒たちの前に差し出すのだ。わたしたちのまわりにあふれている、へらへらべらべらした言葉ではない、活きた言葉をそのままの味で。(岩)

## 昨日読んだ文庫

森永卓郎

私がいままで一番苦労して読んだ本は、マルクスの『資本論』(岩波文庫)だ。私の学生時代は、近代経済学とともに、マルクス経済学が必修だった。やむなく資本論を読み始めたのだが、これが難解であるだけでなく、分量も膨大で、七転八倒した記憶が残っている。

大学で教える立場になったいま、マルクス経済学は、講義科目から姿を消してしまったが、年に一度だけ、そのエッセンスを学生たちに伝えている。しかし、これが受けない。デモもストライキもみたことがない学生に階級闘争だの労働価値説だのと言っても、伝わらないのは当然かもしれない。しかし、所得や資産の格差が空前のレベルまで拡大しているいまこそ、マルクス経済学の意義は大いに高まっているはずだ。そこで、何年か前に、門井文雄ほか『理論劇画マルクス資本論』(かもがわ出版)を学生に読ませた。資本論第一巻のエッセンスだけを劇画にするという挑戦的な本だ。しかし、これも受けなかった。劇画だが、その内容が原作に忠実で、学生は消化不良を起こしたようだ。

最近、とてつもない資本論と出会った。講談社まんが学術文庫の宮下博美の『資本論』だ。門井作品と同じ劇画だが、資本論が、何と恋愛ストーリーとして描かれているのだ。貴族の男女と庶民出身の男性の間で揺れ動く三角関係を織り交ぜながら、庶民出身の男性が、貴族の男性と手を組みながら、資本主義のなかで成り上がっていく物語だ。もちろん物語はすべて著者の創作だが、資本家の病的なカネへの執着とその下で搾取に苦しむ庶民の暮らしが、しっかりと描かれている。何より素晴らしいのは、短時間で読めるということだ。正直言うと、これを読んでも、マルクス経済学の1%も理解したことにはならないと思う。しかし、マルクス経済学への入り口として、多くの人にこの本を読んでほしいと思う。

いまの日本経済は、マルクスがその理不尽に心を痛めていた19世紀のドイツとそっくりだ。本書は、これからの日本をどのようにすればよいのか、考えるヒントになると思うのだ。(獨協大学教授)

## 旅する江戸前鮨 「すし匠」中澤圭二の挑戦

一志治夫著(文藝春秋・1404円)

江戸前ずしと海鮮ずしとの違い(魚に塩を当てたり火を通したり、シャリに合うように魚を手当するのが前者で、新鮮な魚を酢飯の上に乗せて出すのが後者とのこと)を知らなかった評者のような素人はもちろん、玄人にも参考になりそうな一冊だ。主人公、中澤圭二はすし職人がえらぶ尊敬する職人アンケートの1位に選ばれた人物だ。

1963年、東京・杉並生まれの中澤は高校を1年で中退し、料理の世界へ入った。若い職人がどんな修行をして一人前になっていくかが伝わってくる。200年続く江戸前の技術を武器に、国内では功成り名遂げながら、あえて米国・ハワイに進出。しかも〈日本人の精神と技法をもって海外の地場にいる魚を使って握る〉という、険しい道を選んだ。

15年以上の取材で得た材料が、94年に発表したサッカージャーナリズムの好著『狂気の左サイドバック』のように、リズムのいい筆致で料理され読者を引き込む。中澤はハワイ進出時53歳。中高年にエネルギーをくれる。ただ成功者のヒューマンヒストリーだけでなく、江戸時代から戦前・戦後、今日に至るすし文化の変遷も分かる。(栗)


忘れられない 中国留学エピソード
【日中対訳】近藤昭一、西田実仁など42人著 段躍中編 本体2600円+税
留学生の貴重な体験が現在の日中関係を支える「礎」、大きなパワーの源となっている。——福田康夫 元首相
23万の日本人留学卒業生の縮図。両国関係の変遷と中国の改革開放の歩みを知る上で重要な一冊。——程永華 中国大使
たちまち重版!
「中国滞在エピソード」大募集!
中国に滞在したことのある日本人を対象、入選作品を書籍として刊行。最優秀賞(中国大使賞)に賞金10万円の副賞も。
募集要項 http://duan.jp/cn/

習近平主席が提唱する新しい経済圏構想
「一帯一路」詳説
初の邦訳本
中国人民大学教授 王義桅 著
日中翻訳学院 川村明美 訳
本体3600円+税

なぜ、二階俊博は年と共に「進化」と「深化」を続けられるのか。その「全身政治家」の本質と人となりに鋭く迫る最新版本格評伝。
一二階俊博 ——全身政治家——
石川好 著
二階俊博 全身政治家
本体2200円+税

好評発売中
対中外交の躓跌 上海と日本人外交官
対中外交の新視点に大反響! 読売・毎日・朝日・日経・産経・東京新聞全国六大紙書評・記事掲載
たちまち重版!
在上海日本国総領事 片山和之 著
本体3600円+税
元首相 中曽根康弘・元国務委員 唐家璇・東京大学名誉教授 中根千枝 推薦!
日中友好会館の歩み
「争えば共に傷つき、相補えば共に栄える」
隣国である日本と中国の同問題解決の好事例
村上立躬 著
本体3800円+税
日中関係学会主催「宮本賞」受賞論文集 宮本雄二元中国大使監修
日中間の多面的な相互理解を求めて 2500円+税 2015年刊
日中経済交流の次世代構想 2800円+税 2016年刊
日中外交関係の改善における環境協力の役割 3000円+税 2017年刊
日中経済とシェアリングエコノミー 3000円+税 2018年刊
若者が考える「日中の未来」シリーズ
①日中間の多面的な相互理解を求めて ②日中経済交流の次世代構想 ③日中外交関係の改善における環境協力の役割 ④日中経済とシェアリングエコノミー
無料出版相談会
6月23日(土)午後1時~ 池袋
詳しくはhttp://duan.jp/623.htm
『日本』って、どんな国?
世界54カ国・地域の5141人が応募! 初の日本語作文コンクール世界大会入賞者101人の受賞作文集。大森和夫・弘子 編著 1900円+税
新中国に貢献した日本人たち
友好の原点ここにあり
故元副総理 後藤田正晴 推薦
姉妹編 続 新中国に貢献した日本人たち 中国への日本人の貢献 段躍中 編 本体2800円+税
ロングセラー!
同じ漢字で意味が違う 日本語と中国語の落し穴
ビジネス・生活で役に立つ100編を厳選!
久佐賀義光 著 王達 監修 1900円+税
中国中日関係史学会 編 宮吉次朗 訳 本体2800円+税
山梨県立大学教授 張兵 著 本体2600円+税
訪日中国人から見た中国と日本 ——インバウンドのあり方——
訪日中国人旅行者を知る必携の一冊!
民発新聞などで紹介 重版出来!
「ことづくりの国」日本へ ——そのための「喜怒哀楽」世界地図
関口知宏 著
NHK「中国鉄道大紀行」の旅を通じて得た驚くべき世界観!
「目から鱗がおちる思いだ」——加藤青延 NHK解説委員
本体1600円+税
日本倚報社 〒171-0021 豊島区西池袋3-17-15 Tel. 03-5956-2808 Fax. 03-5956-2809 info@duan.jp
The Duan Press
http://jp.duan.jp/ 出版翻訳専門の日中翻訳学院 おかげさまで10周年